

李承晩政權の反日政策

——韓国における日本文化の受容と拒絶（Ⅱ）

一九四五年八月十五日から現在まで——

中村 均

大韓民国の成立と李承晩大統領の登場

第二次大戦後から対立が激しくなった米ソ両国の冷戦構造を背景に、一九四八年八月十五日、南朝鮮では三年間にわたる米軍政が終わり、大韓民国が成立した。

これより先、四五年十二月、モスクワで開かれた米英ソ三か国外相会議は、即時独立を願う民衆の意向とは逆に、最高五か年の米英中ソ四か国による信託統治を決議し、翌年三月には朝鮮独立の方法を協議する第一次米ソ共同委員会がソウルで開かれたが、米ソ両国の直接交渉では解決が不可能であることが明白となり、五月に再開された同第二次委員会は難航して暗礁に乗りあげ、四七年九月、米国が国連総会に朝鮮問題を付記したことにより、四八年五月十日、国連臨時朝鮮委員会の監視のもとで南朝鮮単独選挙が行われ、ここに南北分断が永続・固

定化することとなった。五月三十一日には制憲国会開会、七月十七日には憲法公布、同月二十日の国会では初代大統領に李承晩を選出したのである。

独立式典は、八月十五日午前十一時から首都広場（旧朝鮮総督府前広場）で行われ、東京からは連合軍総司令官ダグラス・マッカーサー元帥も駆けつけ、「過去四十年間、朝鮮の愛国者たちが外国勢力の抑圧を絶ち切るために闘ってきた不屈の態度は、自由不滅の道理を今、全世界の前に立証した」と祝辞を述べた。⁽¹⁾

この日、日本の有力紙は「大韓民国の独立式典」と題する社説を掲げ「一九一〇年八月日韓併合このかた四十年に近い歳月を軍国主義日本による屈辱と搾取に苦しめられていた朝鮮民族が、今や独立を獲得したばかりか、いよいよ世界国家の一員として登場する。その民族的な歓喜の叫びは想像するまでもない。民主主義国家として更生しつつあるわれわれ日本の人民も、大韓民国の独立式典に際して敬服のことばを捧げたい。同時に、われわれは、独立を獲得した朝鮮民族がさらに進んで一日も早く統一を完成し、東亜の復興に寄与してほしいことを、心から念ずるものである」と書いた。⁽²⁾

当時、日本の新聞・通信社の韓国における活動は停止されたままで、各紙の京城特電（日韓国交が正常化し、特派員の常駐が認められるまではソウルとせず、京城としている）はアメリカの通信社であるAPやUP、あるいはその他の外国の通信社から発せられたものを使っている。

李承晩政権は、以来、一九六〇年四月十九日の学生革命によって退陣に追いこまれるまで、第一次共和国としてつづくが、この時期は日本色の一掃とともに徹底した反日教育の時代であり、また李承晩ラインの設定に見るように反日政策が強く打ち出された時期でもあった。

そこで、今回の研究は、この時期における李承晩政權の対日政策、日本との関連での教育状況、韓国人の対日観および日本人の対韓国観などを中心に考察したい。

李承晩の人間像

李承晩は、一八七五年三月二十六日、現在は北朝鮮の地域内に入っている黄海道平山郡陵内洞に、父・李敬善・母・金海全の次男として生まれた。幼名は承龍。先祖は李王朝を築いた李成桂につながり、さらに檀君神話⁽³⁾にもさかのぼることができる⁽⁴⁾とし、韓国の初代大統領に就任すると、神話にもとづく檀君紀元を公式に採用したほどである。

二歳の時、一家は平山から漢城（現在のソウル）に移り、五歳で漢籍を学び、十二歳で科挙の試験を受けたが、失敗。そこで承龍を承晩と改名し、号を雩南（うなん）と称した。頭角を現わすのは、日清戦争がはじまった一八九四年、二十歳の時、アメリカ人宣教師がたてた培材学堂⁽⁵⁾に入ってからで、英語を猛烈に勉強した結果、翌年には学堂の英語教師に抜擢され、また同年に日本公使・三浦梧楼の指揮による閔妃殺人事件⁽⁶⁾が起こると、李朝末期の腐敗政治に反対して立憲君主制を主張している。

しかし、この運動は失敗し、一時、郷里の平山に身を隠さざるをえなくなるが、やがて政府部内に親露派・親米派が抬頭して、これが強大となり、追及の手がなくなると、再び漢城に現われ、培材学堂に学生組織としての協議会を結成して、そのリーダーになる一方、国政改革を訴える新聞を発行し、自ら健筆を振った。また独立協会⁽⁸⁾の有力メンバーとなり、ロシアの内政干渉に反対する闘争を展開、このため一八九八年十一月、当時の守旧派

政府（大韓帝国）によって逮捕され、鞭（むち）打ち百回と終身懲役の刑を言渡されている。

この獄中六年間に著わしたのが、一九〇四年の日露戦争の開戦を契機とした『独立の精神』である。

李承晩は、この時、長老教会に改宗し、キリスト教徒となった。

日露戦争は日本の勝利に終わり、朝鮮半島からはロシアの勢力が駆逐され、代わりに日韓保護条約のもと、日本による顧問政治が朝鮮で行われるが、李承晩自身は開戦後間もない一九〇四年八月、日本の朝鮮軍事占領にもなう赦免令で出獄、十一月には渡米し、その後、ワシントン大学、ハーバード大学に学び、プリンストン大学院で『米国による永世中立論』で哲学博士号を取得する。

ところが、李承晩は、後年、韓国の初代大統領になつてから、一九五三年の新年の新聞インタビューで、アメリカの新聞記者に「私は七年間、日本によって投獄された」⁽⁹⁾と語っているが、七年間の歳月については「数えの年数」として黙認できるとしても、日本による投獄とはウソであり、このへんのことは今日まで誤解されたままとなっている。

もちろん、彼が日本による朝鮮の植民地化に大いに反撥し、運動していたのは事実であるが、問題は多い。アメリカでは朝鮮独立への国際世論の支援・喚起を求めて宣伝活動を展開し、朝鮮総督府の武断政治がはじまった一九一一年、いったん京城（現在のソウル）のYMCAの教師になるため帰国するものの、キリスト教会の「反日陰謀事件」に巻きこまれそうになり、再びアメリカへ亡命している。一九一三年には、ハワイに渡り、居留同胞の間で内部抗争を起こして⁽¹⁰⁾おり、この際、相手方の勢力を抑えるために暴行・脅迫・テロなど手段を選ばぬ暴挙に出て、権勢欲に駆られた異常の性格をのぞかせているのである。

一九一九年、三・一運動⁽¹¹⁾と機を一にして上海に大韓民国臨時政府⁽¹²⁾が樹立されると、対欧米外交の重要性から、米大統領ウィルソンともつながりのある李承晩が国務総理（大統領）に推戴されたが、彼はほんの一時期（一九二〇年十二月から翌二一年五月までの半年間）上海に渡っただけで、あとはアメリカ人の夫人とともにアメリカで暮らし、二五年には独善的な振舞いから弾劾・免職されている。

三十三年ぶりに、米軍用機で、解放直後の祖国に戻ったのは、一九四五年九月十六日である。すでに七十一歳であった。

途中、東京でマッカーサーと会談しているが、祖国に着くと、次のように語った。

「今回の自分の帰国は朝鮮占領米軍司令官のホッジ中将の招きによるもので、金九氏が近く帰国すれば、朝鮮独立完成の指導者として、彼を支持する積りである」⁽¹³⁾

金九⁽¹⁴⁾とは、不屈の独立運動家として名を馳せた朝鮮の英雄であり、日本政府が巨額の懸賞金をかけると中国各地を転々とし、一九四〇年には大韓民国臨時政府とともに重慶に入り、ここで韓国光復軍を編成し、日本進撃を準備していたところに日本の敗戦を迎え、祖国へは一九四五年十一月二十三日に帰国しているが、当時、李承晩としても、金九に敬意を払わざるをえなかった状況が、この言明でうかがえる。

また国内には呂運亨⁽¹⁵⁾、宋鎮禹⁽¹⁶⁾といった錚々たる人物が独立の闘士としており、李承晩が頼りとする唯一、最大の支持基盤は米国であった。

ところが、金九、呂運亨、宋鎮禹の三人とも李承晩派や反対派が放った暗殺者によって非業の死を遂げており、李承晩だけが謀略と独裁政治によって生きのびるわけである。

徹底した反共・反日政策

米国が李承晩を必要としたのは、米ソ冷戦の進展にともない、彼の反共・親米主義が米軍政の代弁者として極めて都合が良かったからであり、ホッジ中將は李承晩の帰国早々から「朝鮮の国父、李承晩博士」とほめたたえ、李承晩もまた米国の期待にこたえて「共產主義の害毒」と「ソ連の脅威」を述べたて、見事なタッグマッチぶりを示している。

しかし、後には米軍政を容共的すぎると非難し、ホッジ中將による中道派育成に反対して徹底的な反共路線を訴えるため、マッカーサーの支援のもとワシントン入りしたほどである。

折りから一九四七年三月のトルーマン・ドクトリン¹⁷⁾によって米国の対ソ強硬政策が打ちだされたことが李承晩に幸いし、米国は南朝鮮の軍政府から中道派を追い出すため、李承晩にあらゆる援助を行うようになる。

ところが、米軍政下の南朝鮮は日本が撤収したあと極度の経済的な混乱に陥り、デモやストライキがたちまちのうちに暴動になる例が多く、南朝鮮単独選挙が実施される直前の一九四八年四月には済州島で左翼勢力の武装蜂起¹⁸⁾があり、大韓民国が樹立したあとの十月には麗水・順天で軍隊の反乱が起っている。

これは済州島の漢拏山にたてこもったゲリラの残党を鎮圧するため移動を命じられた麗水駐屯の国軍第十四連隊が中心となって反乱したもので、反乱軍は武器弾薬庫を襲い、警察署や官公署などを破壊し、次いで順天市に突入して「人民委員会」を設置し、麗水と順天で二千名を越す官民が虐殺され、一週間にわたる政府軍との攻防ののち鎮圧されている。

この反乱が、どんなに悲惨なものであったか。A P通信社のトム・ランバート特派員は「南朝鮮反乱を現地に
見る 鎮庄に行った兵士も寝返り 暗黒と残虐の支配する順天の町」と題して、次のような生々しい現地報告を、
日本の新聞に寄せている。

「水田地帯のかつての平和だった順天の町の道路には殺害された人々が横たわっている。悲嘆にくれた女達や、
おろおろした子供達が見失った父親や肉親をつまづきながらさがしている日暮れの町には全く光りも見えな
い。約二千名の兵士と四百名の警官や民衆からなる暴徒は麗水から殺到、かれらは略奪した武器でしつかり武
装している。反乱軍鎮庄に向った兵士は寝返って、かれらに合流した。勢づいた反乱軍は南朝鮮労働党の旗をた
て示威行進を行っている。この旗や北朝鮮人民共和国の国旗は市内の役所やその他の建物に掲げられ、示威行進
の後、反乱部隊は反左翼分子や警察官を処刑した」¹⁹⁾

大韓民国政府国防部は十一月、反乱首謀者八十九名の死刑執行を行ったが、この事件が契機となり、十二月に
は国家保安法の制定公布、四九年十月には南朝鮮労働党および共產主義団体の非合法化措置がとられることにな
る。

そこへ一九五〇年六月二十五日、朝鮮戦争が勃発する。

この戦争は、自由陣営と共產陣営の後楯をバックに、同じ民族同士が殺戮しあった惨憺たる戦いであり、戦況
が二転三転したのち、五一年六月以後、ほぼ三十八度線上に戦線が膠着して休戦交渉に入り、五三年七月、最終
的な休戦の合意に達するが、李承晩政權の反共イデオロギーは、戦中・戦後を通じて、一層、強められる。

また権力の延命をはかるため、さまざまな不正・不法手段により、韓国における民主主義的政治基盤を根本から

くつがえしていったが、反共路線と併行して、韓国民の日本統治時代への反撥を巧みに利用してとった政策が、その極端な反日主義である。

李承晩の対日政策とは、どんなものであったか。その象徴的なものとして李承晩ライン（これについては後述）があるが、李承晩政権時代は日韓関係が最もギクシャクした時代であり、韓国から日本の勢力が徹底的に駆逐された時期でもある。

李承晩が政権をとって、まず最初に打ちだした政策は「日本帝国主義残滓の掃蕩」であった。

具体的には日本統治中に対日協力に積極的であった人々の肅正であり、アメリカ軍政時代からひきつづき韓国新政府の要職にあった交通部長官・閔熙植、法制処長・俞鎮午、商工部次官・任文相らが親日分子として、一九四八年九月、政府部内から追放されている。⁹²⁾

また同月、李大統領の署名で「反民族行為処罰法」が公布され、これにもとづく反民族行為調査委員会が翌四九年一月から八月末まで設置され、京城百貨店主・朴興植ら八十余名が検察に送られている。⁹¹⁾

しかし、日本統治時代の韓国人官僚や経済人、地主階級が解放後もそのまま米軍政下で温存・重用されたため、対日協力者の肅正は思うようにはいかなかった。日本人が引揚げていったあと、これらの人々の協力なしには、韓国の政治・経済・社会が機能しなかったともいえる。

四九年一月には対馬の返還を要求する宣言を発表し、また済州島沖で操業していた日本漁船の第十七喜久丸（五三・三トン）など五隻を領海侵犯の理由で拿捕（李ライン設定前）、二月には対日賠償調査審議会を設置し、さらに三月末には戦後の日本社会で在日韓国・朝鮮人が「第三国人」として日本の警察と衝突するなど事件を起こ

していることに対する反撥として「韓国の反日感情は燃え上っている。日本政府が在日韓国人に対する現在の態度を改めない限り、日本人実業家、新聞記者の入国は認められない」との大統領談話²³を發表している。

このような李承晩の強硬な反日路線を憂慮したのは在日米軍總司令官である。

一九五〇年二月にはマッカーサー司令官の招きで、日本の吉田茂首相と会談するため来日、また五三年一月にはクラーク司令官の招きで同様、吉田・李会談を行うため来日しているが、いずれの場合も、大して成果はなかった。(李承晩の来日は、この二回と、一九四八年十月、韓国の独立式典に参列したマッカーサーへの返礼として来日したのを合わせて前後三回である)。

李承晩は、当時の日本人に、どうみられたか。日本側の新聞報道によると

「日本に対して突っ張ることを一枚看板にしてきた感じのご本尊が、わざわざ乗り込んでくるとはどういうわけか。結局のところ、吉田・李会談を推進したのは反共陣營の結束を図る米国の極東政策だといってよいだろう。隣り同士の不和ということは無論、両国にとって具合の悪いことである。さればといって、経済的に見ても、日本は三十八度線以南の朝鮮から期待できるものは米とノリぐらいだが、これとてソロバン上は割高だ。特需の恩恵といっても、それは朝鮮動乱からくるものであって、韓国から施されるものではない。

一方、韓国から見ても、日本の肥料、綿布、雑貨はほしいが、台湾の経済みたいに日本なしでは到底、成り立たないといふほどのことではない。李承晩大統領の現実の施策も、援助のパイプを直接、米国につなぎたい意向のようである。要するに、経済的には日韓双方とも、相手なしではやっていけないといった、強い依存性はそれほど感じていないようだ。

かてて加えて、韓国には「日本は過去のあくどい植民地統治に対して反省も謝罪もする気がない」という強い反感があり、日本は日本側で「韓国の態度はエゲツないし、ミミッチい」という感じを持ち、感情上の対立にもなっていた。こうした双方の気持ちが自分の方から折れて出るのは以てのほかという態度になって日韓交渉を中絶させてしまっているといつてよい。

李承晩大統領の来日目的について外務省筋でも日韓関係の調整が主だと見るのもいるし、「いや、クラーク大将へ原子砲の使用など積極的行動を要請しに來たのが主目的だ」と観測する者もある。真相のほどはまだハッキリしないが、クラーク大将が仲立ちをしたという事実からみて、日韓双方のキゲン直しが大きな目的であったことは確かであろうだ。吉田首相としても、李大統領がわざわざ来てくれたからには会談場所にこっちの方から参上するほかないと、六日の閣議でも「白旗をあげるつもりで出掛けてくるよ」と冗談を飛ばしたあと、李氏の宿舎にあてられたクラーク大将の公邸を訪れた。この会談の内容はコーヒ―をすすり、四方山話を折りまぜながら「共同の敵を前にして仲違いをしてはいただけませんね」といった腹芸的な調子で「折れ合った」ということだ」²⁴⁾

李承晩大統領は、吉田首相ら日本側の対応が極めて不快だったらしく、韓国へ帰国したあと、ニューヨーク・タイムズのマックレガー記者に、次のように語っている。

「日韓両国民は現在、共同の敵を持っている。これは共產主義だ。韓国と日本はお互いに相手を必要としている。日本政府のやらなければならない最も重要なことは、韓国民に対して日本はもはや朝鮮半島に強欲な企図を持っていないということを納得させることだ。すなわち、日本は一九一〇年以後の韓国侵略の夢を捨てて、

韓国は韓国人のものであるという事実を認識しなければならない。日本の新聞記者は絶対、入れない」⁽²⁵⁾
その後の対日政策はますます強硬なものとなり、二月には日本漁船の李ライン侵犯に対する警告、また竹島（独島）の領有権の主張、四月には日韓会談の行き詰まり、十月には久保田発言による同会談の決裂とつづくが、これらの問題については、項を改めて述べる。

教育現場からの日本色排撃

日本的なものの追放は、教育の分野で、ひととき強かった。

まず米軍政期には旧朝鮮総督府の行政機構をそのまま利用して漸次、改めていく方針がとられ、教育行政の面では一九四五年九月、旧総督府学務局がそのまま軍政庁学務局（のち文教部に昇格）となり、局長には最初、E・L・ロツカード大尉、十二月からは朝鮮人側の金前億兼（日本統治時代の延禧専門学校教授）が就任し、諮問機関として教育委員会（のち教育審議会）が組織され、解放後の教育の方向、在り方を位置づけた。⁽²⁶⁾

ここで注目すべきことは、愛国教育としての「弘益人間」の育成と、アメリカの教育思想であるデューイの教育理論にもとづいた新教育運動が盛んに強調された点である。

弘益人間とは、簡単にいえば、弘（ひろ）く公（おおやけ）のために尽くす人間となるが、この育成は民族的な独立自尊と固有の文化の醇化昂揚をはかるための必須条件として、今日まで、これが韓国の教育理念の基礎となっている。

一方、新教育運動が目指したものについては、この運動の推進者であった吳天錫（日本統治時代の普成専門学

校教授、アメリカのコーネル大、コロムビア大学院卒、デューイの門弟で、教育学博士）が次のような性格づけをしている。

- ① 伝統的教育としてあった階級主義、差別主義の排撃
- ② 人間を道具化した教育目的への反抗
- ③ 抑圧された教育への反抗と自由に基盤をおく教育への企図
- ④ 画一主義的教育の排撃と個人差にもとづく教育の追求
- ⑤ 過去の文化的遺産を伝達することだけを目的とした知識中心の教育と実生活から遊離した書物中心の教育の排撃および人間全体の発達向上を目指し、現実との交流を持った生きた教育の志向

本来、弘益人間の育成と新教育運動の展開は、必ずしも同一方向にあるものでなかったが、この両面性を併せ持った民族民主主義が、日本色の払拭のあと、教育分野で大きな流れとなった。²⁷⁾

学校制度の上ではアメリカ型の六・三・三・四制が採り入れられ、日本統治時代の複線型から単線型となり、初等・中等教育での教科の上では民族文化の創造発展を重視するため、国語科に力を入れ、またアメリカ教育の強い影響を受けて、従来の歴史、地理、公民（初等教育では修身）、理科、工作を統合した社会生活科（のち道徳科は分離・独立する）がつくられた。

当初、最も困ったものは、日本人の教員が引揚げたあと、その補充をどうするかであった。米軍政時代にはソウル師範大学、ソウル女子師範大学、大邱師範大学の三師範大学のほか、十六の師範学校、十三の臨時教員養成所をつくったが、就学児童・生徒の急増に対応できず、校長以下教員の大部分が無資格者というところもあり、

教員の絶対数の不足は教育の質的な低下にもつながった。

京城帝国大学の解体とソウル大学の誕生

解放直後に出版された『朝鮮解放年報』²⁸⁾によると、高等教育の段階では、日本統治時代からの大学・専門学校を継ぐものとして、米軍政時代には

京城大学Ⅱ文学部、法学部、経済学部、医学部、理工学部

京城大学予科Ⅱ文科、理科

京城法学専門学校

京城医学専門学校

京城工業専門学校Ⅱ数学科、物理学科、化学科、工業経営学科、工業化学科、電気化学科、繊維工業学科、機

械工学科、電気工学科、通信工学科

京城経済専門学校

京城鉱山専門学校Ⅱ鉱山学科、金属工学科、機械工学科、応用数学科、地質学科

京城齒科医学専門学校

京城薬学専門学校

京城師範学校

京城女子師範学校

水原農林専門学校Ⅱ農学科、林学科、畜産学科、獣医学科、農工学科、農業化学科、農業経済学科、農業生物学科

大邱医学専門学校

光州医学専門学校

釜山水産専門学校Ⅱ漁撈学科、製造学科、養殖学科、遠洋学科

大邱農業専門学校Ⅱ農学科、農芸化学科

大邱師範学校

延禧専門学校Ⅱ文学院、商経学院、理学院、神学院

世富蘭偲医学専門学校

恵化専門学校Ⅱ仏教学科、文学科、史学科

普成専門学校Ⅱ法学科、経済学科、文学科

梨花女子専門学校Ⅱ翰林院（文科、家事、教育、体育、法政）芸林院（音楽、美術）、杏林院（医学、薬学）

京城女子医学専門学校

淑明女子専門学校Ⅱ家事科、技芸科、専修科（理・文）

中央女子専門学校Ⅱ政経科、家事科、保育科

京城天主教専門学校

があり、解放後に発足したものに

京城音楽学校

国学専門学校

建国技術（専門）学校Ⅱ土木科、建築科、電気科

朝鮮神学校

韓国夜間大学

があつた。

これらは、いずれも教授陣の不足に悩みながらアメリカ型の新制大学へ切替えに懸命であつたが、米軍政当局が最も力を入れたのが旧京城帝国大学の後身である京城大学、同予科を中心に、ソウル市内にある国公立高等学校教育機関の一つにまとめ、その運営をアメリカ式に民選による理事会に委託するこいう「国立ソウル総合大学校計画案」である。

一九四六年六月、この案を初めて発表し、八月にはこのための「国立ソウル大学校設置に関する法令」を施行公布したが、これに対する教授、学生、教育界、言論界の反撥が強く、反米的な色彩を持った学園のストライキはソウル市内だけでなく、地方の中学校にまで波及し、ストライキ参加校は四千校、学生・生徒の除籍処分が五千人、教員の解雇処分が三百八十人に達した。

結局、修正案によつて紛争が片づくまで、一年という長い時間がかかった。

もともと、京城帝国大学は一九二四年五月の官制で、日本で六番目の帝国大学としてつくられたものである。最初は予科だけを創設、次いで二六年四月に法文学部と医学部、四一年五月に理工学部が開設されている。

これは、一九二二年の「朝鮮教育会」⁽²⁹⁾の改正で、朝鮮にも大学教育が認められるようになり、朝鮮人自らの手によって民立大学を設立しようという運動があつたことから、朝鮮総督府が急拠、東京に働きかけ、台湾に先がけて帝国大学をつくつたものともいえる。

当時、朝鮮教育界の重鎮であつた李商在が民族紙の「東亜日報」紙上で訴えた「民立大学発起趣旨書」は、次のように民族的な覚醒をうながすものであつた。

「われわれの運動をいかに開拓するか。政治か外交か産業か、もちろん、これらのことはすべて必要である。

しかし、すべての基礎となり、要件となり、最も先決で、最も力があり、最も必要な手段は、教育でなければならない。……教育は、われわれの進路を開くに当つて唯一の方便であり、手段であることは、明瞭である。

ところで、教育にも段階や種類があり、民衆の一般的知識は普通教育によつて授けることもできるが、深遠な知識と学理は、これを高等教育に期さなければならない。社会の批判を求め、有為の人材を養成しようとすれば、最高学府の存在が最も必要である。試みに見よ、あの欧米の文化と欧米人の生活も、その発達と向上の原動力は、ことごとく大学にあつたことを。……ここに感ずるところあつて、あえて満天下の同胞に向つて、民立大学の設立を提唱するものである」⁽³¹⁾

ところが、総督府は、この要求を換骨奪胎して、京城帝国大学の設立に動き、民立大学実現の夢はついに実現しなかつた。

最初の入学試験は一九二四年三月に行われ、五月に、その第一回生が入学してきた。

京城帝国大学予科第一回生の内地人（日本人）と朝鮮人の内訳は次のとおりである。⁽³²⁾（カッコ内は志願者数）

文科九〇〥内地人六一（一五二）朝鮮人二九（一四一）

理科八〇〥内地人六四（二五四）朝鮮人一六（一〇〇）

合計一七〇〥内地人一二五（四〇六）朝鮮人四五（二四一）

この比率について、民族紙の「朝鮮日報」は「朝鮮大学（京城帝国大学と書かず、この名称をのちのちまで使っている）試験願末を聞いて」と題する社説で「試験の結果は朝鮮人を差別したもので、試験問題そのものも日本歴史や漢文の訓読の出題など朝鮮人に明らかに不利であり、日本人の合格者数は朝鮮人のその三倍に達している³³⁾と、不満を表明した。

だが、このハンディキャップを乗り越えて合格した朝鮮人学生は、総じて優秀であり、李承晩政權になって法制処長の職を追われた金前鎮午（第一回生）や、日本統治下では朝鮮語学会事件に連座し、解放後はハングル専用運動の先頭になった崔鉉培、李熙昇（いずれも第二回生）らは、いずれも京城帝大を卒業した逸材であった。

結末は、あつ気なかった。

日本敗戦の日、教職員、学生ら約二百名が大学に駆けつけて来て、天皇の詔勅を聞き終わると、君が代の合唱となった。

翌十六日には学内の朝鮮人職員が京城大学自治会を結成、十七日には大学の門に大極旗が掲げられ、表札から「帝国」の二文字が消えた。米軍進駐後は、法文学部および医学部の一部は米軍宿舎にあてられ、理工学部は野戦病院に転用された。大学が再開されるのは医学部が十月二十二日、理工学部が十一月十一日、法文学部が十二月二十七日であるが、十一月の初めには日本人の教授陣（助教授、講師も含めて）がすべて解任される³⁴⁾。

新しい教授陣には、旧京城大など日本の大学、あるいは欧米の大学を出た朝鮮人学者があてられた。

現在、国立ソウル大学校は、文理科、法科、師範、商科、工科、医科、歯科、薬科、農科、芸術の各単科大学と大学院で構成され、キャンパスも旧京城帝国大学の跡地からソウルの南郊に移転している。

日本に引揚げてきた人たちを中心にしての同窓会は健在であり、一九七四年、創立五十周年記念誌として『紺碧遙かに』を刊行したが、韓国には物故者・行方不明者の七百人をのぞき、五百人に上る同窓会員（一九八七年現在）がいるという。⁹³⁵

反日教科書の編纂

大韓民国政府が樹立されてから一年半後の一九四九年十二月三十一日、「教育法」⁹³⁶が施行公布された。

その第一条では「教育は弘益人間の理念のもとに、すべての国民をして、人格を完成し、自主的な生活能力と公民としての資質を具有させ、民主国家発展に奉仕し、人類共栄の理想実現に寄与させることを目的とする」というたい、これにより、韓国の教育理念が確立されたが、そこにあるものは先に述べたように民族主義と民主主義がミックスされたものとなっている。このうち、とくに民族主義による民族文化教育が悪夢のような日本統治時代への反撥と重なって重視され、教科書編纂も、この線に沿って行われた。

ところが、今日まで、李承晩時代の反日的教科書を分析した研究は、日韓両国側とも、全くといってよいほど、ない。

韓国側にしてみれば、いまさら「反日」のテーマでくくる研究の必要はないという考え方であろうし、日本側では

「触らぬ神に祟りなし」で、このまま負（マイナス）の部分にはアンタッチャブルでいきたいということであろうか。

どこの国の教科書でも、日本をのぞいては自国中心の記述が目立つものだが、それにしても韓国の教科書の、とりわけ李承晩時代の「社会生活科」教科書の、日本に対する攻撃ぶりは、すさまじい。そして、ある面では誤解している点も多い。

ここでは、代表的な例として、一九五〇年発行の国民学校（日本の小学校に当る）五年生用『外国の生活』³⁷⁾の「六」に出てくる「湿度の多い島国、日本の生活」と、一九五六年発行の中学校三年用『国際生活』³⁸⁾の「二」当面する外交問題」の「2」に出てくる「反共外交と対日関係」をとりあげてみよう。

その1

「湿度の多い島国、日本の生活」

「日本のことは、わが国の人には誰でもよく知っている。しかし、なぜ、それほど、よく知っているのだろうか。

この国は今からほんの数年前まで、わが国を侵略したし、また何十年にもわたって、わが国と、そこに住む私たちを徹底的に悪どい手段で搾取してきました。その結果がどうなったか。その間、沢山の熱烈な愛国者たちが、どんなに勇ましい戦いをつづけてきたか。また独立を奪われたまま、外国の勢力下で暮すことが、どんなに悲惨なものであるか。われわれは絶対に、これを忘れてはいけません。

その国は、わが国のすぐ東のほうにあり、国土はわが国より少し広いが、人口が二倍以上あり、このため、

いつも領土拡張をねらっており、太平洋戦争が起こし、そして負けてしまったのも、理由はそこにあります」
「島国であることは、そこに住む人間を、一つの考えに固めてしまうのには大変、便利ですが、それがまた人々の心を狭くし、性分を大変、陰悪なものにもさせています。そして日本人は気が荒く、スケールが小さい、という例は、私たちがよく知っていることです。

世界地図を開いてみましょう。この列島の東側の太平洋には暖流が流れており、季節風も南から吹いてきます。この国がいかに蒸し暑く、雨が降りつづくのか、先生の話をよく聞きましょう。このことは、彼らの衣食住にも大きな影響を与えていますが、わが国では今でも簡単な出来具合の日本式家屋が残っているのを見ることが出来ます。日本人が着ている着物がまた簡単で、ハダカでいる時が多いことや風呂にたびたび入る習慣も、すべて、このような気候からきています。日本の女が髪をあげて、首のうしろにゆわえていることや、着物のソデが大きく、ゲタをはいていること、日本人の食べ物が淡白なこと、また沢山の人が眼鏡をかけ、肺病（結核）が多いこと、すべて気候のせいです。わが国で毎日のように見ることでできる青く晴れた日は少く、このため青空に大変、憧れています」

「日本は太平洋戦争に負け、アメリカの支配下に入って新しい出発をしていますが、戦争によって国力は極端に弱まり、そのうえ洪水や地震が度々、起るので、国民の心は常に殺伐に向かいがちです。しかし、仕事には昔から熱心で、自分の仕事は自分で仕上げるという責任感があり、困った時には助け合う団結心も強いので、外国を再び支配するという夢は捨ててはいないはずです。私たちの隣りに、こんな国があることを常に忘れず、私たちはあらゆる面で、精神を確立し、団結して、これに当らなければなりません」

その2

「反共外交と対日関係」

「わが国の外交で困難な問題は、その路線をどうするかである。

われわれは、どんなことがあっても、共産主義者たちに勝利をおさめ、国土統一を果さなければならない。われわれの外交が反共でなければならぬことは明確である。ところが困ったことは対日関係である。

日本は、わが国を侵略した三十六年もの間、われわれを圧迫し、いじめ抜いたにもかかわらず、隣国の非共産主義国家ということから、われわれは共産主義と戦うに当って、友好関係が必要と認め、われわれの日本に對する宿怨も水に流して、正常な国交関係を結ぼうと、何年も努力してきた。ところが、その日本は、奸悪な昔の根性を清算できず、あらゆる手段を講じ、これに応じようとしていない。だいたい日本のような国家は自由陣營の援助がなければ生きていけず、共産勢力の侵略で倒れることは明白である。また第二次大戦において真珠湾奇襲攻撃のような不法行為をしたにかかわらず、米国をはじめ自由国家陣營は、日本に寛大な気持ちで平和条約を結び、その經濟復興のため莫大な利益を与えている。それだけでなく、日本は韓国動亂中、国連軍が必要とする軍需物資その他を調達・販売して、はかり知れないほどの利益と恩恵を受けているのである。このように、どこからみても日本は、自由陣營に積極的に参加してアジアの民主主義の保壘となつて共産勢力と戦っているわが国とは、積極的に協力しなければならないのであるが、今なお、それを実行しないているのは、彼らが二つの世界の対立を利用して漁夫の利を得るという間違つた考え方を持っているからである。民主主義、共産主義の両陣營に秋波を送り、民主陣營からは經濟的援助を受けながら、共産國家に対しては商品

を売りつけるという日本のやり方は、浅薄にして、大義を忘れ、目前の利害のみに走っているものである」

以上のように、この二つの教科書とも、日本に対して、相当に手厳しい内容となっている。国民学校の教科書の場合、学習者である児童が地図と対比しながら、自ら考えるというアメリカ式の生きた教育をとり入れ、日本人は責任感が強いなど、正（プラス）の評価をした面もあるが、全体を見ると、日本を邪惡なものとしてとらえ、こんな恐ろしい国がすぐ隣りにあることは警戒しなければならぬと教えている。

中学校の教科書の場合も、日本は朝鮮戦争で大もうけをしたうえ、自由・共産の二つの世界に秋波を送って漁夫の利を得ている不徳義漢として、攻撃の対象となっている。しかも本文の記述のあと、生徒自身が考える「問題」として

○日本の立場は、国際的にみて、どうなのか

○対日関係が好転できない理由は、何か

○その責任は、どちらの国にあるのか

という問いかけがなされ、結局は、ずるくて、暴虐な「日本悪者論」を学びとる仕掛けになっている。

物の見方は、立場が違えば、異なってくるのは当然ともいえる。それぞれの自国中心主義から、韓国としては、この教科書にあるような見方もできようし、また日本側からは逆の見方もありうる。

要は、相手からの非難・不信・誤解を、どうするかだ。日本は、その点、あまりにも逃げと自虐の姿勢が強く、事態を真正面から見据えないきらいがある。これでは問題は、いつまでたっても解決しないであろう。

ちなみに、朝鮮の独立運動家、安重根が一九〇九年、前韓国統監の伊藤博文をハルビン駅頭で暗殺した事件は、日本の現在の教科書ではテロ行為というニュアンスをこめて「暗殺」と記述したものが多く、これに対して韓国の現在の教科書では、「銃撃殺害」⁽⁴⁰⁾「射殺」⁽⁴¹⁾などとなり、「天誅」を加える意味が強く出ている。

また韓国では、今でも一般に、国民学校（小学校）児童の早い段階で、反日感情を醸成するようつとめているといわれるが、こういう教育を受けて育てば、どうなるであろうか。⁽⁴²⁾

それはさて、李承晩政権時代の教科書を総合すると、ここで描かれている日本は、次のように分類することができる。

- ①日本は過去に侵略者として韓民族を虐待した
- ②日本はこざかしく伸びている国である
- ③日本は自由世界の信義を守らない国である
- ④日本人は自己の利害のためには、どんな悪らつな手段も辞さない、残忍な国民である

李承晩ライン

李承晩ラインとは、一九五二年一月十八日、韓国国務院告示第一四号として出された「大韓民国隣接海洋の主権に対する大統領宣言」によって設定された海洋主権線である。

これによって、韓国は李ライン内における日本漁船の操業を締め出し、これに違反すると、漁船を拿捕し、漁民を釜山収容所に抑留して、戦後日韓関係史の中でも、最も紛争の種となったものである。

前身のものとしては、日本の敗戦直後の一九四五年十月、連合国司令官のマッカーサーが占領下の日本人の漁業活動を制限するために設定したマッカーサー・ラインがあったが、五二年四月二十八日のサンフランシスコ講和条約の発効にともない、これが撤廃されることが予想されたことで、韓国側は平和ラインと称して打ち出してきたものであり、日本側は一貫して、これを不法・不当・暴挙であるとして抗議をつづけていた。

李承晩ラインがもたらした日本の韓国への反撥は大きい。

一九五三年二月四日には済州島沖で操業していた大邦丸（八〇トン）が韓国警備艇に拿捕され、この際、乗組の漁撈長が射殺されるという大邦丸事件が起きると、韓国を非難する日本の世論が沸騰し、さらに同月二十七日、韓国政府が竹島（韓国側という独島）は李承晩ライン内にあるとして、その領有権を声明、ひきつづき七月十二日には竹島周辺で日本の海上保安庁巡視船が韓国警備艇の銃撃を受け、また韓国の官憲が同島に常駐したことが伝えられると、日韓の対立は、いよいよ深刻なものとなった。⁴³⁾

竹島問題については、日本政府は一九六〇年三月末までに四十一回にわたって対韓抗議を行っているが、韓国政府は一九五四年九月二十四日には「独島切手」三種類を発行したりして、これを無視し、また日韓基本条約にも、この帰属がうたわれないまま、今日に至っている。

さて、当時、日本の知識層や政治家はどのような韓国観を持ったか。

東大法学部長・尾高朝雄は、次のような文章を、新聞に寄せている。

「由来、朝鮮民族は激越であり、感情的である。休戦協定成立の際、あくまで北進を叫んで悲嘆号泣した韓国民の姿は、この性格をもっとも激しくあらわしたものであった。……韓国政府が、この民族感情の一つのけ

口として対日強硬攻撃に拍車をかけていることは決して賢明と思われないが、さりとて、決して理由のないことではない。こうした情勢判断は韓国との会談をすすめるにあたり、日本側としてまず用意すべき重要な心構えである。

水産業から見れば、ひろい海を回遊するサバの一部分を、日本の漁民が済州島沖で獲ったからといって、朝鮮近海の水産資源に何ほどの影響もあるものでないという。それを不当に禁止することによって、日本国民の憤激や反感を買うのが、韓国民のために、どこから見て得策であるのか、韓国の当局は、そこを考えるべきである。

他方、日本のサバ漁の業者や漁民は、韓国側の禁止や捕獲にあつて、いまや死活の岐路に追いこまれている。……これをこのまま放置すれば、窮迫感は激高に変じて、日本の対韓国民感情のゆゆしい悪化をまねくに相違ない。したがって、この不測の災害に対して、応急の対策を実施することは、日韓会談の辛抱づよい進行とならんで、日本政府の打つべききわめて重要な手段といえる」⁽⁴⁴⁾

韓国の対日強硬策が理由のないことではないながらも、論調はすべて韓国非難に終始しているのである。また国会審議でも韓国への反感が頂点に達していたことは、一九五三年十月二十八日の衆院外務委員会での次のようなやりとりでも、よく分る。

佐々木盛雄委員（自由党）　李承晩ラインをめぐる日韓の紛争であるとか、竹島の問題というものは、単なる国際法上の問題ではなく、単なる原則論の争いの問題ではなくして、まさに公海の上において、あるいは自国の領土上におきまして、主権が不法に侵略を受けておる、こういうことは明らかに海賊的な行為である。

岡崎勝男外務大臣　私の立場といたしましては、海賊的などという言葉は使いたくありませんが、非常に合法的でない不都合な行為であると思っております。

佐々木委員　……国敗れたりといえども、この地球上の一弱小国であるところの韓国から、日本がこんな屈辱を受けて、手も足も出ない、まことに醜態でないかという声は、私はけだし一般の世論、国論としては当然のことであろうと思います。（第一六国会衆議院外務委員会議録第三二号）

このような蔑視的な反韓国感情は保守党だけでなく、社会党や共産党などの革新勢力をも巻き込み、日本中で一層の高まりをみせ、また悪化していったが、一方、これには李承晩政権はもとより、韓国人全体が鋭く、反応した。

韓国側の新聞が伝える李承晩の発言には次のようなものがある。

濟州島での発言　「日本人は李承晩がいなくなれば、再び、わが国を侵略して、自分たちの奴隷にしようという野心を持っているので、われわれは決して奪われまいという決心をして、敵に隙を見せないようにしなければならぬ」⁴⁵⁾

釜山での発言　「日本人がこのごろ、李承晩が死にさえすれば韓国をわがものにできると、とんでもない考えを持っているので、私は二度と、このわれわれの祖国が彼らに踏みにじられないよう、肝に銘ずる『遺書』を書き残さなければならない」⁴⁶⁾

またフランスのAFP電は韓国政府の新聞係秘書・張基鳳の言明として次のように伝えている。

「李承晩大統領は李承晩ラインを守るといふ政策を決して変更しない。韓国の漁場を荒すため李ライン内に侵

入する日本人漁夫の生命は保証しないであろう。韓国の指導者は、日本政府が日本漁船に韓国水域への侵入を許し、共産軍と戦っている韓国の後方地域を脅やかしており、これによって日韓両国民の間に国際的な敵意をひき起していると考えている」⁴⁷⁾

これでは日韓関係が好転するはずはない。李承晩ラインが設定されて以来、一九六六年六月、日韓基本条約が締結し、李ラインが廃止されるまでの十四年間に、韓国側に拿捕・抑留された日本の漁船と漁船員は二三三隻、二七九一名、そのうち帰還数五七隻、二七八六名、マツカーサー・ラインの設定後、韓国警備艇による拿捕が開始された一九四七年からの数を合計すると、拿捕された漁船三二七隻、三九一一名、そのうち帰還は一四二隻、三九〇三名となっている。

久保田発言問題

米国の斡旋により一九五一年十月二十日からはじまった日韓予備会談、および、これにつづく一九五二年二月十五日からの日韓会談本会議という日韓交渉の過程で、日韓両国間の対立を増幅・激化させたものに、李承晩ライン、竹島をめぐる紛争のほか、久保田発言を契機にした日本の在韓財産請求権の問題がある。

これは、日本側が韓国政府の現施政地域に限定された対日請求権のうち法的根拠と証拠関係が確実なものだけ弁済するが、もし、これ以外に政治的な請求をすれば、日本が統治時代に行なった植林、水田、港湾施設、鉄道などにわたった「経済的な培養」のほうが、むしろ大きい、また第二次大戦後、日本人が残してきた私有財産については国際法の原則に従って原権利者である日本人に補償請求権がある、としたのに対し、韓国側ではこれを

すべて否定し、自らの対日請求権のみを前面に押しだしてきたものである。

結局、日韓条約の締結では日本側の財産請求権は棚上げされ、日本が総額八億ドル以上の請求権資金（政府無償贈与三億ドル、海外経済協力基金による政府借款二億ドル、民間借款三億ドル以上）を供与することで落着いたが、途中、四年半も、久保田発言を機に日韓会談が決裂したままだったのは、両国ナショナリズムの相克のすさまじさを物語っている。

久保田発言とは、一九五三年十月十五日の第三次日韓会談の請求権分科会で日本側首席代表の久保田豊一郎が韓国側の発言に関連して、次の五点を述べたものとされる。

- ① 対日平和条約の締結以前に朝鮮が独立したのは国際法違反である
- ② 終戦後、在鮮日本人が全部、引揚げさせられたのは国際法違反である
- ③ 財産請求権についての韓国の主張は国際法に違反する
- ④ カイロ宣言に「朝鮮人民の奴隷状態に留意し……」とあるのは、連合国が興奮状態のうちに書いたものである
- ⑤ 日本の朝鮮統治は朝鮮人に恩恵を与えた

これに対し、韓国側は、久保田発言は過去の植民地支配時代の罪悪行為を合法化しようとする「妄言」であるとし、その撤回を要求したが、日本側はこれに応じなかった。このため、十月二十日には第三次日韓会談そのものが決裂したのである。

久保田発言の内容は、全体の文脈の中で見ないと、判断を誤まりやすい。外務省の会談議事録から、そのやり

とりを見てみよう。（韓国側代表は「朝鮮」とか「韓人」という言葉は使っていないと思われるが、議事録のまま採録）

洪璉基・韓国代表　歩みよるといふが、日本のいう請求権と、韓国のいうそれとは、法律的には意味が違う。韓国がいうのは、朝鮮が日本から分離することにもなる清算問題だ。日本の主張は政治的だ。性質が違う。歩み寄るわけにいかない。日本側がそんなことをいうならば、われわれは考え直さなければならない。

久保田豊一郎・日本側首席代表　日本側の請求権も法律問題である。

洪　韓国の国会では水原の虐殺事件や韓国併合直後の虐殺事件、あるいは三十六年間の統治の間、治安維持法で投獄、死亡させられたりした点についての請求権を出さなくてはならない。また朝鮮米を世界市場より不当に安い値段で日本へ持っていた。その価格の返還を要求せよ、という意見もある。日本としては、ここらあたりで手を打ったほうがいいのではないか。われわれは、日本が、こんな請求権を出すとは思わなかった。われわれは、純法律的な請求だけを出して政治的色彩のあるものは止めたのだ。にもかかわらず、日本側が三十六年間の蓄積を返せというならば、韓国としても三十六年間の被害を償却せよというほかない。

久保田　韓国側で国会の意見があるからと、そのような請求権を出すというならば、日本としても朝鮮の鉄道や橋をつくったり、農地を造成したりし、大蔵省は当時、多い年で二千万円も持ち出していた。それまで返せ、と主張して、韓国側の政治的請求権と相殺しようということになるではないか。（韓国側各委員に興奮の表情があらわれ、各自バラバラに発言する）

洪　あなたは、日本人が来なければ韓人は眠っていたという前提で話しているのではないか。日本人が来な

ければ、われわれはもっとよくやっていたかも知れない。

久保田　よくなっていたかも知れないが、まづくなっていたかも知れない。これから先、いうことは、記録にとらないでほしいが……私見というが、自分が外交史の研究をしたところによれば、当時、日本が行かなかったら、中国か、ロシアかが入っていたかも知れないと考えている。

張曜根・韓国代表　千万円とか二千万円とかの補助は、韓人のために出したのではなく、日本人のために出したもので、その金で警察や刑務所をつくったでないか。

柳泰夏・韓国代表　久保田さん、そういうことをいえば、お話にならない。日本側で昔のことは水に流してすまなかったという気持ちで話をしようというならば別だ。

久保田　お互いに将来のことを考えてやりたい。法律的な請求権の問題で話をしてゆきたい。

洪　法律的なものといっても、当時の日本人の私有財産が韓人と同等の立場で蓄積されたものと考えてるのか。

久保田　こまかいことをいえばキリがなくなる。ただ三十六年間というものは、資本主義経済機構の下で平等に扱われたものである。時代を考えてほしい。

洪　なぜ、カイロ宣言に「韓人民の……」と書かれているのか。

久保田　私見であるが、それは戦争中の興奮した状態で書かれたもので、私は、奴隷とは考えない。

……

久保田　例えば、私有財産のみならず、もっと大きな、領土を平和条約締結前に日本の同意を得ずして処分している。これも前例がない。さらに六十万の在韓日本人がハダカで送還されるという大きな問題は国際法違

反と考えている。

洪 私所有財産のような小さな問題も国際法違反というのか。

久保田 私見ではあるが、私有財産を没収するということをやれば、違反だと思う。

洪 近代戦のような総力戦では私有財産が戦争目的のために総動員される。こういう点から戦後の私有財産処理の方針が決められた。

以上のやりとりから、久保田発言は韓国側の発言に誘発されながら、私見のかたちで日ごろの考えを述べたものであることが分る。

第二次大戦時にチェコを併合したドイツの場合、チェコにあるドイツの財産は米軍政府により処分されたあと、この精算代金がドイツ側に返されたが、日本人の在韓財産は、そのようにならなかった。

まず米軍は南朝鮮に進駐した当初、帰属財産として国公有財産のみを対象にして接収し、日本人の私有財産については保護するという立場であったが、朝鮮民衆の強い不満をみると、「敗戦国所属財産の凍結と移転制限の件」を発表して（一九四五年九月二十五日）、日本人財産のすべてを凍結し、つづいて「在南朝鮮日本人財産の権利帰属に関する件」を公布して（同年十二月十二日）、これらの日本人財産を接収した。その後、帰属財産の払い下げを行ない、軍政期間中に鉄道・運輸・通信・電力・ガス・水道・鉱工業・大農場はじめ各種企業体や重要施設を中心に、企業体五十三件、不動産八三九件、その他の財産九一六件を処分、残りは「米韓間の財政および財産に関する最終協定」（一九四八年九月十一日）によって李承晩政權に譲渡し、李承晩政權は「帰属財産処理法」をつくり、約三三万件を処分している。

韓国内を歩くと、今も、日本式家屋が古ばけた姿で建っているのにぶつかることがあるが、これらは敗戦直後に売り払ったものか、米軍に没収されたあと、李承晩政権によって払下げ処分がなされたものであろう。

日本人が引揚げる前後の混乱した模様については、次のような「京城発」の新聞報道がある。

「長年、営々として築き上げた地盤や財産を殆んど二束三文で売り払ったものも少くない。かかる動揺につけこむ輩が内地人住宅を目掛けて買い漁った。私（伊集院記者）が住む社宅にも、この買漁り組が幾組もやって来た。……この間、驚くべき現象は、いはゆる闇物資が街に氾濫したことである。砂糖、マツチ、石鹼をはじめ繊維製品にいたる、あらゆる物資がどこから湧き出たかと眼を瞪るほどに夥しく店頭に売り出された。……どっと氾濫した退蔵物資が消化され尽したあとには極度の物資欠乏と生活逼迫を見るのではないかと憂慮されている」⁽⁴⁸⁾

日本の敗戦によって、あらゆる「日本的なもの」が次々と、この地から追いだされ、処分されていった中で、日韓関係が最も險惡となり、文化交流の上でも杜絶状態になったのは、李承晩政権時代である。

ところが、その李承晩政権も、倒れる日がやってきた。

一九六〇年三月十五日の不正選挙を糾弾する反政府運動は、四月十九日の学生デモで頂点に達して青瓦台の大統領官邸を襲い、米国が見切りをつけたのを知った戒厳司令官兼陸軍参謀総長の宋堯讚は動かず、ついに李承晩は国会に大統領辞任書を提出し、直ちにこれが受理され、ここに十二年間にわたる独裁政治は幕を閉じた。

註

- (1) 一九四五年八月十六日付「朝日新聞」
- (2) 一九四五年八月十五日付「朝日新聞」
- (3) 天神の子・桓雄が人間の女に変身した熊と結婚し、古朝鮮の始祖・檀君王儉を産んだとされる神話。檀君は一五〇〇年にわたって朝鮮をおさめたが、のち隠棲して山の神になったとされる。
- (4) 西暦年に二三三三年を加算すると檀君紀元になる。李承晩は一九四八年から、これを公式に採用し、一九六一年までつづいた。
- (5) 一八八五年、アメリカ北監理教会の宣教師によって設立された朝鮮最初の近代的私立学校。奉仕精神にもとづく人材の育成を目的とした。
- (6) 日清戦争直後の三国干渉を機に、閔妃とその一族を中枢とする政権がロシアと結んで排日政策をとったことから、一八九五年十月八日払暁、三浦梧楼・日本公使が日本守備隊や新聞記者、大陸浪人らに命じて景福宮を襲撃させ、閔妃を斬殺した事件。三浦以下四十八名の日本人が日本で裁判に付されたが、全員が証拠不十分として免訴・釈放された。
- (7) 一八九八年一月一日、純ハングルの週刊紙として「協成会会報」を発行。次いで、これが発展的に解消して日刊紙の「毎日新聞」となる。
- (8) 一八九六年七月、李朝末期の開化派官僚を中心に結成された独立確保のための政治結社。純ハングル文を用い、当初、隔日刊で、のち日刊となった「独立新聞」を機関紙とし、大衆運動に乗りだったが、九八年十一月、

守旧派の巻返しで協会解散と指導者逮捕の弾圧を受けた。

(9) 一九五三年一月十九日付「朝日新聞」でのニューヨーク・タイムズ紙マックレガー記者のインタビュー記事。

(10) ハワイ在住の亡命朝鮮人が結成した「大韓国民会」で、一九一五年、李承晩が反幹部運動を起したことから、ハワイの朝鮮人社会そのものが二派に分裂して激烈な派争を展開した。

(11) 一九一九年三月一日を期して発生した朝鮮近代史上最大の反日運動。朝鮮人の動員数二〇〇万人、死者七九〇九人、負傷者一五〇〇〇人、逮捕者五万人、日本側の死者八人、負傷者一五八人、破壊された官庁一五九。

時の朝鮮総督・長谷川好道は責任をとって辞任し、次の第三代朝鮮総督・斎藤実は、これを機に「文治政治」に切換えた。

(12) 一九一九年四月、朝鮮人独立運動家たちが上海で組織した亡命政府。当初、李承晩を首班にいただいたが、指導者間の対立抗争もあって混乱がつづき、李承晩の弾劾・免職後は金九が率い、四〇年からは重慶に移り、四年十二月、日米開戦の翌日、対日宣戦を布告、祖国を目ざしての進撃にそなえたが、間にあわず、解放の日を迎えた。

(13) 一九四五年九月十九日付「朝日新聞」

(14) 李承晩と同じ黄海道出身の独立運動家。年は李承晩より一つ年下で、農民運動や独立運動に参加して、投獄や脱獄を重ね、三・一運動後は上海に渡って大韓民国臨時政府に参画。解放後、帰国して統一朝鮮の完全自主独立に奔走したが、一九四九年、李承晩派によって暗殺された。号は白凡。

(15) 朝鮮の独立運動家。一八八六年、京畿道生まれ、培材学堂に学んだのち、中国に渡り、南京の金陵大学に学

び、一九一八年、上海で新韓青年党を結成、一九年の三・一運動では大韓民国臨時政府の樹立に参加した。左派社会主義の立場にありながら、日本の近衛文磨や大川周明、中国の孫文らとも親交があり、日の丸抹消事件を起こした『朝鮮中央日報』の社長をつとめたこともある。四五年八月の解放に際しては総督府の要請に応じて治安維持に協力、朝鮮建国準備委員会を結成して委員長となり、九月には朝鮮人民共和国副主席、朝鮮人民党委員長となり、左右合体に努力したが、四七年、李承晩派に暗殺された。

(16) 朝鮮の独立運動家。一八九〇年、全羅南道生まれ、日本の明治大学を卒業し、帰国後、三・一運動に参加して一年間服役、その後『東亜日報』社長に就任、四〇年の廃刊まで民族紙のリーダーとしての良心を守った。解放後、右派勢力を糾合して韓国民主党を結成し、同党首席総務となったが、四五年十二月、反対派に暗殺された。

(17) 一九四七年三月十二日、米大統領トルーマンが突然、米議会の上下両院合同会議で、共產主義の脅威を受けているギリシャとトルコに対し四億ドルの軍事援助と軍事使節の派遣を要請し、以後、米国は自由主義国家を共產主義から守ると宣言したものの。

(18) 南朝鮮単独選挙に反対して、一九四八年四月三日、南朝鮮労働党の指揮のもと、済州島民が蜂起した武装闘争。島内の警察署を襲撃して次々に占拠、一時は全島をほとんど掌握したが、国防警備隊が大量に送りこまれると、島の中央部にある漢拏山を根拠地としてパルチザン闘争を展開した。

(19) 一九四八年十月二十八日付「朝日新聞」

(20) 一九四八年九月十日付「東亜日報」

(21) 一九四九年三月十二日付「東亜日報」

- (22) 一九四九年一月九日付「東亜日報」
- (23) 一九五〇年三月三十一日付「東亜日報」
- (24) 一九五三年一月八日付「朝日新聞」
- (25) 一九五三年一月十九日付「朝日新聞」
- (26) 咸宗圭『韓国教育課程變遷史研究』韓国ソウル・淑明女子大学校出版部、一八一ページ
- (27) 鄭永壽ほか『韓国教育政策의 理念』韓国教育開發院、五三ページ。前掲、咸宗圭『韓国教育課程變遷史研究』一八五ページ。阿部宗光・阿部洋編『韓国と台湾の教育開發』アジア經濟研究所、八四ページ。
- (28) 民主主義民族戦線編『一九四六年版朝鮮解放年報』南朝鮮・京城府・文友印書館、三四九ページ。
- (29) 最初の「朝鮮教育会」は一九一一年八月二十三日、勅令第二二九号によって公布され、これにともなう「朝鮮總督府令」第一一〇号とあわせ、朝鮮における普通教育の方向、教科課程などを定めた。以後、一九二〇年、二二年と改正が行われている。
- (30) 李朝末期には独立協會副会長をつとめ、日本統治後は「朝鮮日報」社長に就任し、非妥協的な民族戦線の樹立を呼びかけ、朝鮮民族運動史に大きな足跡を残した。
- (31) 一九二三年三月三十日付「東亜日報」
- (32) 京城帝国大学創立五十周年記念誌編集委員会『紺碧遙かに——京城帝国大学創立五十周年記念誌』京城帝国大学同窓会、一四ページ
- (33) 一九二四年四月三日付「朝鮮日報」

- (34) 森田芳夫『韓国における国語・国史教育』原書房、一一三ページ。前掲、『紺碧遙かに——京城帝国大学創立五十周年記念誌』四八一ページ
- (35) 旧城大同窓会臨時管理委員会「旧城大同窓会関係会報第一号・一九八七年」「旧城大韓国同窓会員概況数表」
- (36) 一九四九年十二月三十一日、法律第八六号で公布、第一、第二、第三条から成り、弘益人間の理念を強く打ちだしている。
- (37) 조진수編『사회생활과·五학년소용·다른 나라의 생활』一九五〇年、韓国文教部、一一二ページ
- (38) 유진오『국제생활』一九五六年、ソウル・一潮閣、一二九ページ
- (39) 中教出版『中学生の社会科・日本の歩みと世界の歴史』二〇六ページ、大阪書籍『中学社会・歴史的分野』二二一ページ、東京書籍『新編・新しい社会（歴史）』二三七ページ、日本書籍『中学社会・歴史的分野』二一九ページ
- (40) 李元淳ほか『中学校・国史』韓国文教部、二五四ページ
- (41) 金哲俊ほか『高校・国史』韓国文教部、二六二ページ
- (42) 別技篤彦『理解されない国ニッポン』祥伝社、一一三ページ
- (43) 一九五三年七月十三日付「朝日新聞」
- (44) 一九五三年十月七日付「朝日新聞」
- (45) 一九五七年十二月十日付「東亜日報」
- (46) 一九五八年十月十四日付「東亜日報」

(47) 一九五八年二月二十五日付「朝日新聞」

(48) 一九四五年九月二日付「朝日新聞」